

大段なが越中より友人の
17生の集りて了るものあり別
して多きものありあはれに
わらわらと笑ひあはれ
あはれ

蕪村に到りては

美しきしめしむる為めに
百方よりあそびつくすこと

さきに中したるかたは

主観の句は古くは

観の句多くは従て所

謂酒の味をいふあり

す酒よりよきものは弱

しに思ふに勝りに思ふ

或はは満足するや

有し蕪村

かあうの酒をいふもの

なくあそびや

うかお酒に昔

例、撰律外は ちよぐけり 毒のそら

酒ニテ 行をやましむるを

酒ニテ 明ニクフトキハ ちよぐけり

酒を考へる家の

女房たちをいふた

ア一を壓了我れ

酒のみをいふ



ブーを壓了我れ
酒のちを酔あり

ま旦よ 蚊のこがね
とやま

酔上もいふ酒上も
イニズ 徳利のふ

酒十瓢 酔ゆけて
や

復本を

あり 風や酒酔に

詩うた子

漁者 棋者

山此糸と千程の酔
ありて

鬼母や新酒の

鬼母イセ伊丹イの
負に 伊丹も

故所や酒はあり

かふあるまの遊びて

柏蓮が

先まにその狂句を

思ひ出せ其風調に

倣ふ

小春風と眞帳の

大不ソコ七合五勺のふ

魚イサ家寒し

酒に 頭カの
雪をを

一瓢のいんを採よ

酒に頭のを焼く

一 粟のいんを採よ
行ント飲トナリ 餅た、り
カケコトナリ

其角は酒も好む故

に酒のみりりりりりり

芭蕉は酒を飲まぬ故

酒の白少くたれりりりりり

自家のま飲はふりも

あはれいところ 藍村に

自らの深くま飲も

一切りして酒らりりり

酒十杯を其本をの

下やみに馬にことりりり

ゆりり行く 其処に趣味

あり此趣味は其 吟

にあろ酒の味にあろりりり

酒を飲るいとを好ま

ま。人か此種の句には

と云た、酒味を好み

酒

特に詩を讀み漢詩

相考も下戸の眼前に

酒十粒を其末をの
下やみに馬に之をこぼし
ゆかて行く其処に趣味
あり此趣味は其の
味

にあら酒の味にあら
酒を飲まぬをぬま
ま。人か此種の白には
ふかたの酒味をぬま
酒
村に詩を讀み漢語
推考下戸の眼前に
ふかたの酒味をぬま
も。また此種の酒味
は美しきもの。是の酒味
はふかたの酒味をぬま
大所にて其の酒味
す。この酒味は其の
味

十月十四日
着

身城をぬま
子史

此は世有にふかたの酒
味